

出来事の発生を表す「～がある」文

久保田 一 充

愛知淑徳大学

【要旨】本論文は、動詞的名詞(VN)をガ格名詞に据える動動的な「～がある」文(「出来事発生文_{VN}」)を考察対象として取り上げ、その特徴を詳細に記述する。出来事発生文の「ある」は、存在文の状態的な「ある」との対比で、単に「動的」だと特徴づけられてきたが、動態性の比較的弱いものと比較的強いものがあることを論じ、この言語事実をもとに、出来事発生文_{VN}を一般発生類と逆行類の2類に大別する。そして、この2類型について、構文形式・意味、表現の客観性、VNの項具現、「ある」の意味などに注目して、多角的な特徴づけを行う。また、2類型の「ある」の機能的性質にも着目し、動態性と項認能力とを機能的性質と関係づけ、一般発生類の「ある」は機能的性質が比較的弱く、逆行類の「ある」は機能的性質が比較的強いことを確認する*。

キーワード: 動詞的名詞(動名詞)、存在文、項具現、逆行構文、機能動詞

1. はじめに

「～がある」文(ガ格名詞が有情物の場合は「いる」)は、日本語において最も基本的な構文の1つである。この構文は、「冷蔵庫の中にケーキがある」のような場所とモノとの空間的關係を表す場所存在文、「100 mを8秒台で走れる人間はいない」のような記述に該当する対象の存否を表す絶対存在文(西山2003)、「研究のよき理解者として、太郎には妻の花子がいた」のような記述該当対象の具体例を挙げるリスト存在文(西山2003)などとして、様々な機能を果たす。「太郎には妻がいる」のような所有文への拡張も見せる。「人気がある、元気がある」のような形容詞的なまとまりを形成するものや、可能性の存在を述べる「～することがある」、経験の存在を述べる「～したことがある」という表現もある。以上のような、存在文、所有文(またはそのように分析できるもの)としての「～がある」文の意味・機能的な広がり数が数多くの研究によって明らかにされている(寺村1982;高橋・屋久1984;森山1988;西山2003,2009a,2009b,2013;大塚2004;新居田2004;岸本2005;金水2006;岸本・影山2011など)。

「～がある」文には、(1)のような、(狭義の)存在文、所有文とは区別される、動動的な事態を表すものもある。この種の「～がある」文を「出来事発生文」と呼ぶ。

* 本稿の執筆にあたり、お二人の匿名査読者より、多くの有益なご指摘をいただいた。議論の大きな問題点に気づかされ、言語事実に対して改めて向き合い、分析を深めるよいきっかけとなった。同僚の下岡邦子氏や名古屋大学大学院の久保田樹氏には、細部にいたるまで原稿を読んでいただき、大いに助けていただいた。みなさまに、ここに記して深く感謝申し上げる。

- (1) a. キノウ地震ガアッタ。 (寺村 1982: 156)
 b. (次の日曜日に) 小学校で運動会がある。 (影山 2011: 40)
 c. あの交差点では (しょっちゅう) 事故がある。 (同: 40)

出来事発生文の「ある」は、ガ格項として出来事名詞 (「地震, 運動会, 事故」) を選択し、その出来事名詞が表す事態の〈発生〉を意味する動態述語である。そのため、出来事発生文は、場所名詞句がデ格で標示される点 (小学校 {で/*に|, あの交差点 {で/*に|), 単純非過去形で未来 (例 (1b)) や習慣 (例 (1c)) の意味を表す (翻って、単純非過去形で発話時に成立している事態を描写できない) 点で、「ある」が状態述語の存在文 (例 (2)) とは違い、「行う」や「起こる」のような典型的な動態述語文 (例 (3)) との並行性を見せる。

- (2) (今,) 冷蔵庫 {*で/に|} ビールがある。 (現在)
 (3) a. (次の日曜日に) 小学校 {で/*に|} 運動会が行われる。 (未来)
 b. あの交差点 {で/*に|} は (しょっちゅう) 事故が起こる。 (習慣)

出来事発生文に関する以上の記述は先行研究においてしばしば見られるものであり (寺村 1982; 高橋・屋久 1984; 森山 1988; 中右 1998; 大塚 2004; 岸本 2005; 影山 2011; 岸本・影山 2011), 出来事発生文の基本的な特徴は明らかにされていると言える。しかし、あくまで基本的な特徴の記述にとどまり、それ以上に掘り下げた記述が少ないのも事実である。記述が不十分な部分としては、(i) 状態的な「～がある」文の分類・整理が進んでいるのに対して、出来事発生文に関しては、文法論において区別されるべき類型が存在するのか、存在するのであればどのような類型が認められるのかということがほとんど議論されていないということがある。(ii) また、先行研究において記述の対象となっていた出来事発生文は、主に単純事態名詞 (simple event nominal, SEN; Grimshaw 1990, 2011) (「地震, 運動会, 事故」) をガ格項にしたものであり、(4) のように動詞的名詞¹ (Verbal Noun, VN) (「噴火, 引退, 虐待, 連絡」) をガ格項に据えた出来事発生文 (「出来事発生文_{VN}」) は看過されてきた。

- (4) a. 23日アイスランドで、火山の噴火があったようですが、[…]
 (<http://plaza.rakuten.co.jp/ascensionreimei/diary/201003240000/>)
 b. 先週は、12人の調教師の引退と上村騎手の引退があった。
 (<http://blog.livedoor.jp/suyapapa/archives/68098124.html>)
 c. 昨日、〇×老人ホームで職員から入居者への虐待があった。
 d. ビザの発行について、大使館から連絡があった。

SEN と VN の重要な違いは、前者は項をとらないが、後者は、動詞一般がそうで

¹ これは、日本語学で従来「動名詞」と呼ばれてきたものと同じものを指す (例えば、影山 (1993))。ここでは森山 (1988) の用語を採用し、「動詞的名詞」と呼ぶ。

あるのと同様に表示する事態への参与者を項としてとるという点である。さらに、VNは「する」を直接伴って動詞化することも可能である（「噴火する、引退する、虐待する、連絡する」）。だとすると、出来事発生文_{VN}は、「VNする」文とどのように特徴が異なるのかということが問題となる。(iii)さらに、先行研究による記述では、出来事発生文と存在文とのつながりが不明瞭であった。すなわち、存在文の「ある」と出来事発生文の「ある」が「状態 vs. 動態」という対立する概念によって特徴づけられ、両者の違いが強調されてきたように思われるが、同じ「ある」が用いられている以上、そこに連続性は認められないのだろうか。出来事発生文において〈発生〉というメタ言語が与えられたこの「ある」は（中右 1998；影山 2011；岸本・影山 2011）、状態述語の「ある」から派生したと考えられるものであるにもかかわらず、同様に〈発生〉を表すとしてよい他の動態述語（「起こる、発生する」など）と同程度に「動的」なのであろうか²。

以上の問題点を踏まえて本稿は出来事発生文_{VN}の分析を行う。当該構文の特徴をより正確に把握するために、「VNする」文（受動形も含む）やSENの出来事発生文（「出来事発生文_{SEN}」）、存在文などの関連する構文も適宜取り上げながら記述を進めていく。まず次節にて、出来事発生文の「ある」には、動態述語の特徴が比較的強いものと、動態述語の特徴が比較的弱く〈存在〉の「ある」に類する一面が認められるものがあることを指摘し、「ある」のこの性質の違いによって出来事発生文_{VN}を2類（一般発生類・逆行類）に大別する。第3節から第5節にかけては、出来事発生文_{VN}のこの2類型が単に「ある」の動態述語の性質が異なるだけではなく、形式、意味、視点関与のあり方、項具現などの様々な側面において異なる特徴を見せることを明らかにしていく（以下表1参照）。第6節では、存在文の「ある」と出来事発生文_{VN}の2類型の「ある」との異同を整理し、それぞれの特徴と動詞の機能的性質の強弱とを結びつけて説明していく。第7節では、まとめと今後の課題について述べる。

表1 出来事発生文_{VN}の2類型とその特徴

	一般発生類	逆行類
形式	特になし	XからYにVNがある
意味	VNPが表す事態の発生	有情物Xから有情物Yへの情報／物の求心的移動の発生
表現の客観性	客観的	主観的
VNの項・付加詞の統語的位置	VNP内部	VNP外部
「ある」の動態性	半動的	動的
「ある」の意味	〈発生〉	〈逆行〉

² 例えば影山（2011）は、(1b)は(i)のように、(1c)は(ii)のようにパラフレーズが可能であるとしているが、(1b)、(1c)の「ある」は、(i)、(ii)の「行われる、開かれる」、「起こる、

本節の最後に、以下のような、形式上は出来事発生文_{VN}と似ているが、実際にはそうではなく、本稿の考察対象から除外されるものについて触れておく。

- (5) また、交際をスタートさせてもお互いの結婚観に温度差があったのでは、恋愛の先に結婚があるとは限りませんよね。 (<http://www.okinawa-en.com/>)
- (6) 好中球減少症の原因で最も多いものの1つに薬物誘発性の好中球数の減少がある。 (<http://merckmanual.jp/mmpej/sec11/ch132/ch132b.html>)

(5), (6) に関しては, VN 句 (VNP) の表す出来事の発生を描写するものではない。(5) の存在文は, 恋愛をすることと結婚をすることの時間的前後関係を表現している。これは, 場所存在文と見なすことができる。ただし, 「石橋を渡った先に病院がある」のようなものとは違い, 抽象的な場所と抽象物との位置関係を表す場所存在文である。(6) は, リスト存在文 (西山 2003; 金水 2006) である。リスト存在文は, 変項 x の具体的な値を列挙することによって, 同時にその値が空ではないことを述べる機能をもつ (西山 2003: 413)。例えば「研究のよき理解者として, 太郎には妻の花子がいた」であれば, 命題関数 [x が太郎の研究のよき理解者である] の変項 x を満たす値として「花子」が存在したことを述べている。(6) も同様に, 命題関数 [x が好中球減少症の原因で最も多いものの1つである] の変項 x を満たす値として, 「薬物誘発性の好中球数の減少」が存在することを述べている。

2. 「ある」の動態述語的特徴と出来事発生文_{VN}の2類型

前節で述べたとおり, 従来, (1) - (3) のような事実を基に出来事発生文の「ある」は「動的」だと特徴づけられ, 存在文の状態的な「ある」との違いが強調されてきた。しかし, 典型的な動態述語文と並行した特徴が出来事発生文に常に観察されるわけではない。例えば, 「～するまでに X (時間) がかかる」という表現との相性について見てみる。(7), (8) から分かるように, この表現は動態述語文を選択し, 状態述語文とは相容れない。

- (7) 地震が起こるまでにかかなりの時間がかかった。
- (8) *冷蔵庫にビールがあるまでにかかなりの時間がかかった。
cf. 冷蔵庫にビールがあるようになるまでにかかなりの時間がかかった。

(9) の出来事発生文_{VN}は, 典型的な動態述語文の(7)と同様に問題ないが, 出来事発生文_{SEN}の(10)と, (11)の出来事発生文_{VN}は, 存在文の(8)と同様に相性が悪い。

- (9) 「連絡/指示/食料の支給/情報の提供」があるまでにかかなりの時間がかかった。

発生する」と同程度に「動的」なのであろうか。

- (i) (次の日曜日に) 小学校で運動会が「行われる/開かれる」。
- (ii) あの交差点では(しょっちゅう)事故が「起こる/発生する」。

- (10) *|地震／事故／運動会／卒業式| があるまでにかかなりの時間がかかった。
 (11) *|噴火／虐待／掃除／練習| があるまでにかかなりの時間がかかった。

(10), (11) の示唆する、動的な「ある」の非動態述語的側面は、次のように説明できる。「～するまでに X (時間) がかかる」との相性は、事態における変化点 (開始点・終結点) の有無と関係するものである。事態アスペクトの類型において、〈活動〉・〈到達〉・〈達成〉は、開始点であれ終結点であれ、何らかの変化点が表示事態に含まれるが、〈状態〉にそのような変化点は含まれない (Smith 1991)。前 3 者は動的事態で後者は状態的事態であるため、変化点の有無は事態の動・静と関係のある要素の 1 つだと言える。(12) と上記 (8) から分かるように、「～するまでに X (時間) がかかる」は、変化点を表示事態に含む〈活動〉(例 (12a)), 〈到達〉(例 (12b)), 〈達成〉(例 (12c)) との相性はよいが、変化点のない〈状態〉(例 (8)) との相性が悪い。

- (12) a. 太郎が笑うまでにかかなりの時間がかかった。
 b. 太郎が集合場所に到着するまでにかかなりの時間がかかった。
 c. 太郎がプラモデルを組み立てるまでにかかなりの時間がかかった。

この事実から、(9) の出来事発生文 v_N は表示事態に変化点が存在し、出来事発生文 sen の (10) と、(11) の出来事発生文 v_N は表示事態に変化点がないことが確認できる。後者の出来事発生文の「ある」も、出来事の〈発生〉を表す動態述語ではあるが、動的事態に内在するはずの変化点が表示事態に欠落している点で状態述語的側面があると言える。この状態述語的側面は、〈存在〉の「ある」から引き継がれたものだと考えられる。

以下に、問題の「半動的」な出来事発生文の表示事態を、「地震がある」を例にして図示する (図は Smith (1991) を参考に作成した)。同図に並べて示した、典型的な動的事態 (「花子が笑う」)、典型的な状態的事態 (「ビールがある」) と比較されたい。点線は動的事態が成立している時区間を表し、単純線は状態的事態が成立している時区間を表す。I は開始点で、F は終結点であるが、括弧付きの標示はそれらが事態の一部でないことを意味している。

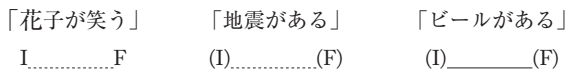


図 1 事態の時間的な構造

(13) - (15) の言語事実も同様に、出来事発生文のなかに表示事態が変化点を含まないものがあることを示している。各例では、事態がまさに成立した瞬間を描写する場面、すなわち、事態の開始点を焦点化するような場面が想定されている。

- (13) a. (状況：電話が来た瞬間) 連絡があった！
 b. (状況：食料を手渡された瞬間) 食料の支給があった！

- (14) a. (状況：地面が揺れ出した瞬間) 地震が [#あった/起こった] !
 b. (状況：楽団が演奏を始めた瞬間) 卒業式が [#あった/始まった] !
 (15) a. (状況：噴煙を目にした瞬間) 噴火が [#あった/起こった] !
 b. (状況：清掃作業が始まった瞬間) 掃除が [#あった/始まった] !

(16), (17) から分かるように、このような場面において、開始点を表示事態に含まない状態述語文の使用は当然不適切 (#) と判断される。

- (16) (状況：太郎の口角が上がった瞬間) 太郎が笑った!
 (17) (状況：ぶつけた箇所が青くなってきた瞬間) あざが [#あった/できた] !

このことから、発話状況上適切と判断される (13) の出来事発生文 v_N は表示事態に開始点が存在するが、発話状況上不適切と判断される、出来事発生文 SEN の (14) と、(15) の出来事発生文 v_N は表示事態に開始点がないことが確認できる。

「ある」の動態述語的特徴 (または状態述語的特徴) に関する以上の事実を以下の表 2 に整理する。特徴欄の非網掛部分が状態述語的特徴を示すもので、網掛部分が動態述語的特徴を示すものである。ここでは、この表から次の 2 つの事実を確認しておきたい。(i) 出来事発生文 v_N は、「ある」の動態述語的特徴の強弱によって 2 類に大別される。すなわち、動態述語的特徴の比較的弱い「ある」をとる I 類と、動態述語的特徴の比較的強い「ある」をとる II 類である。(ii) 出来事発生文 SEN と出来事発生文 v_N I 類に関しては、「ある」の動態述語的特徴において存在文と鋭く対立するわけではなく、むしろ、表示事態に変化点が欠落しているという点において「ある」の状態述語的特徴が垣間見えることから、存在文との連続性が認められる。

次節以降では、本節で確認された出来事発生文 v_N の 2 類型について、特徴の詳細な記述を進めていく。記述の結果、この 2 類型は単に「ある」の動態述語的特徴が異なるだけでなく、形式・意味、表現の主観性 (客観性)、項具現のあり方、「ある」の機能性の強弱などの様々な側面において性質を異にすることが明らかになる。まずは第 3 節、第 4 節にて、I 類・II 類の基本的な特徴を説明しておく。項具現に関する特徴については第 5 節で詳述する。説明の便宜上、はじめに II 類を取り上げ、後に I 類の説明に移る。

表 2 「～がある」文の類型と「ある」の動態述語的特徴

	場所名詞句 の格標示	単純非過去形 の時間的意味	「～するまでに X (時間) がかかる」への出現	事態成立の 瞬間を描写
存在文	ニ格	現在	不可	不可
出来事発生文 SEN	テ格	未来/習慣	不可	不可
出来事発生文 v_N I 類	テ格	未来/習慣	不可	不可
出来事発生文 v_N II 類	テ格	未来/習慣	可	可

3. 出来事発生文_{VN II}類：逆行類

日本語では、「1人称>2人称>3人称」という人称の階層において、相対的に上位の参加者が相対的に下位の参加者に働きかける場合は無標の順行態が選択され、反対に、相対的に下位の参加者が相対的に上位の参加者に働きかける場合は、「てくる」や「てくれる」などを標識に用いた逆行態が選択される (Shibatani 2003; 古賀 2008; Koga and Ohori 2008)。例えば、1人称参加者から3人称参加者への働きかけは無標の順行態で表現されるが (例 (18a)), 3人称参加者から1人称参加者への働きかけは有標の逆行態で表現される (例 (18b))。順行態は、話者の直示的中心³に対して遠心的に方向づけられた事態、または話者の直示的中心に対する方向性に関して中立的な事態を表すが、逆行態は、話者の直示的中心に対して求心的に方向づけられた事態を表すと言える (Shibatani 2003)。

- (18) a. 私が弁護士に電話 {した/*してきた/*してくれた}。
 b. 弁護士が私に電話 {??した/してきた/してくれた}。

出来事発生文_{VN II}類も、(18b) のような逆行構文と同様の文法的意味をもつ (例 (19))。このことから、以降、出来事発生文_{VN II}類を「逆行類」と呼ぶことにする。(19a) – (19c) は3人称参加者から1人称参加者への、(19d) は3人称参加者から2人称参加者への働きかけを表している。(19e) のように、3人称参加者から3人称参加者への働きかけの場合は、話し手の共感性がより低い参加者 (「弁護士」) からより高い参加者 (「娘」) への働きかけを表す (古賀 (2008), Koga and Ohori (2008) 参照)。

- (19) a. 昨晚遅くに忘年会幹事から (私に) 電話があった。
 b. 後日、「あの例は非文だ」と山田先生からメールで (私に) 指摘があった。
 c. 災害時には、学校から (私たちに) 食料の支給があった。
 d. ビザの発行について、大使館から (君に) 連絡があった?
 e. 離婚裁判について、昨日、弁護士から娘に説明があった。

逆行類によって人称階層上の位がより高い参加者からより低い参加者への働きかけを表現することはできない (例 (20))。

- (20) a. *{私/君/娘} から弁護士に電話があった。
 b. {私/君/娘} が/から弁護士に電話した。

逆行類は次のように特徴づけられる。(i) 「XからYに」という格パターンを、基本的にはVNP外部にとる (VNP内部においては「XからYへの」)。(ii) 逆行類に出現可能なVNは、「電話、指摘、支給、提供」のように、有情起点Xから有情

³ Shibatani (2003: 273) は、話者の直示的中心 (the speaker's deictic center) を “the physically and relationally circumscribed sphere surrounding the speaker” と定義している。

着点Yへの情報／物の移動が伴う事態を表すものに限られる⁴。(iii)事態は、Xから、話者の直示的中心に存在するYへと求心的に方向づけられている。(iv)逆行類は主観的な表現である。

(i)について、逆行類に出現可能なVNはどれも、(21)のように逆行類の存在とは独立に「～から～に」(「～から～への」)という格パターンを選択することができる。そして、逆行類のカラ格項・ニ格項は決して「ある」が選択する要素ではなく、あくまでVNの項であることが、VNを「何」で置き換えた場合に(22)のように文の文法性が低下することから確認できる。これらの事実から、逆行類に見られる当該の格パターンはVNから引き継がれたものだと考えることができる。項のVNP外具現については、5.1節で詳しく述べる。

- (21) a. 花子から私への {電話／指摘／連絡／説明／報告／質問} (を無視した。
 b. 政府から私たちへの {食料の支給／物資の提供} (はありがたい。
 (22) * 花子から私に何があったの？

(ii)について、「XからYに」(「XからYへの」)という格パターンをとりうるVNであっても、X・Yを有情起点・有情着点とする情報／物の移動を表すと解釈されない「虐待、復讐」のようなVNは、逆行類には用いられない(例(23))。

- (23) a. ??老人ホーム職員から私に虐待があった。
 cf. 昨日、○×老人ホームで職員から入居者への虐待があった。(I類)
 b. ??花子から私に復讐があった。
 cf. 出所後すぐに、犯人から警察への復讐があった。(I類)

(iii)について、逆行的方向性の源泉は「ある」にある。「ある」が〈逆行〉の文法的意味を表すということである。(21a'), (24)から分かるように「～から～に」という格パターン自体は逆行的な事態を指向するものではない。

- (21) a'. 私から花子への {電話／指摘／連絡／説明／報告／質問} (は無視された。
 (24) 私から花子に {電話／指摘／連絡／説明／報告／質問} した。

最後に(iv)について、まずは「主観的な表現」(反対に「客観的な表現」)の意味するところを確認しておく。ここでの「主観的・客観的」というのは、事態描写

⁴逆行類のVNに課せられるこの条件と、文一般において主語名詞句のガ格・カラ格交替が許される動詞に関する条件(伊藤(2001)参照)とが同じであることが指摘できる(例(i), (ii))。この事実は、逆行類の格や項具現に関する特徴を一般的なメカニズムから捉えられる可能性を示唆しているが、これについての議論は本稿の射程を超えるものであるため、これ以上は立ち入らない。

(i) 私 {から／が} 花子に電話してあげる。
 (ii) 私 {*から／が} 会議に出席してあげる。「まずは私、次は君」のような〈順序〉の解釈は想定していない。

における視点関与のあり方のことである。特定参加者の視点をもって事態描写を行う表現は「主観的」で、特定参加者に視点を重ねない視点中立的な表現は「客観的」だと見なされる(益岡(1991,2007)参照)。例えば(25b)のような被害受動文や(25c)のような「～てもらう」受益文は、視点配置の対象となる被害者／受益者(「田中」)を項にとり、その視点から事態を描写する構文であるため主観的な表現だと見なされる。対照的に(25a)のような受動文は、そういった被害者の存在を含意せず、視点中立的な事態描写を行う客観的な表現だと言える。

- (25) a. 昨日、本山銀行社員 ID が不正に使用された。
 b. 田中は、昨日、本山銀行社員 ID を不正に使用された。
 c. 田中は、昨日、本山銀行社員 ID を不正に使用してもらった。

出来事発生文_{VN}逆行類(ひいては日本語の逆行構文一般)については、話者の直示的中心に関わる参加者を事態の受け手として項にとり、その視点から事態描写を行う主観的な表現だと言える。表現の主観性に関するこの特徴は、出来事発生文_{VN}I類が客観的な表現であることと鋭く対立するものであるため重要である。

以下では、類似の構文との比較を通して、出来事発生文_{VN}逆行類の特徴を掘り下げていく。まず、「～てくる」逆行構文・「～てくれる」逆行構文と出来事発生文_{VN}逆行類とを比べる。前二者と後者の間には、次のような重要な相違点がある。すなわち、「～てくれる」逆行構文は受益の意味を表し、「～てくる」逆行構文は受害の意味と結び付きやすいため⁵、この2つの構文は利害性に関して有標的だと言えるが、出来事発生文_{VN}逆行類は利害性に関して中立的である(例(26))。

- (26) a. {嫌なことに／?嬉しいことに}、花子が私に {指摘／説明／報告／質問} してきた。
 b. {*嫌なことに／嬉しいことに}、花子が私に {指摘／説明／報告／質問} してくれた。⁶
 c. {嫌なことに／嬉しいことに}、花子から私に {指摘／説明／報告／質問} があった。

次に、「～がくる」という表現との異同に目を向ける(例(27))。「～がくる」は、出来事発生文_{VN}逆行類と類似の意味をもつ。すなわち、話者の直示的中心に対して求心的に方向づけられた事態を表し、さらには利害性に関して中立的である。

- (27) 花子から私に {電話／連絡} が {きた／あった}。

⁵ 古賀(2008)、Koga and Ohori(2008)では、「～てくる」逆行構文が標示する利害性は「中立／受害」であると記述されており、受害の意味は未だ慣習化の過程にあると考えられている。「(嬉しいことに)花子が私に電話してきた」のように、受害の意味が感じられない場合があることは確かであり、受害の意味がある場合もその濃淡は様々である。

⁶ 皮肉の解釈はここでは意図されていない。

しかし、(28) から分かるように、「～がくる」は出来事発生文_{VN} 逆行類に比べて共起可能なガ格名詞句の範囲が狭い。

- (28) a. 政府から私たちに {食料の支給/物資の提供} が {*きた/あった}。
 b. 花子から私に電話で {質問/指摘/説明/報告/指示} が {*きた/あった}。
 b'. 花子から私にメールで {質問/指摘/説明/報告/指示} が {きた/あった}。

(28b, b') の場合は、(b') のようにガ格名詞句がメールや文書などの可視的対象を指すのであれば「～がくる」の使用が容認されるが、(b) のように発話行為を指す場合は「～がくる」の使用は認められない。この事実から、「～がくる」と出来事発生文_{VN} 逆行類は意味的に重なる部分があるものの、前者はガ格名詞句が指示する可視的対象の移動という具象的領域を指向する表現であり、発話行為などにおける抽象物(情報)の移動を表すことが難しい((27) から分かるように不可能ではない)。一方で、後者には移動の抽象性に関するそのような制限はない。

4. 出来事発生文_{VN} I 類：一般発生類

逆行類は、格パターンと事態の方向性に関する指定があり、出現可能な VN も語彙的に限定的であった。これとは対照的に、出来事発生文_{VN} I 類には、(29) の例から分かるように、格パターンや事態の方向性に関する特別な指定はない(ただし、項具現は VNP 内部に限定される。この点は 5.1 節で詳しく述べる)。VN についても、自然現象や非意図的事象、言語的行為や非言語的行為などの様々な出来事表すものが出現する。つまり、この類型は、逆行類と比べて、より「一般的に」事態の発生を表すものだと言える。この事実から、以降、出来事発生文_{VN} I 類を「一般発生類」と呼ぶことにする。

- (29) a. 23日アイスランドで、火山の噴火があったようですが、[...]。 = (4a)
 b. 先週は、12人の調教師の引退と上村騎手の引退があった。 = (4b)
 c. 昨日、○×老人ホームで職員から入居者への虐待があった。 = (4c)
 d. なお電解中に5ミリリットル/時程度の水の蒸発があったので、前記塩化銅溶液をエッチング槽に供給する際に調整した。
 (http://www.patentjp.com/07/L/L100272/DA10001.html)
 e. 外来患者のインフォームドコンセント取得に学生が同伴していたが、患者を待つ間に外来待合室のソファで居眠りがあった。
 (http://www.kshp.jp/, 「平成24年度第3期実務実習実施状況」)
 f. 文京・松岡両キャンパスサークル間の交流促進を進めた結果、[...]他キャンパスサークルへの加入があった。

(http://www.u-fukui.ac.jp/cont_about/outline/pdf_management/18jigyoku_houkoku.pdf)

- g. 表3が示すように、likeの使用頻度は圧倒的に多い。[…] Jucker and Smith (1998)では、カリフォルニア州立大学の学生を対象にした調査で、60秒に3.5回、つまり約17秒に1回、likeの使用があったとしているが(176)、本調査ではさらにそれを上回る頻度を記録した。

(http://crs.w3.kanazawa-u.ac.jp/other/doc/12_20_kobayashi_takashi.pdf)

- h. そもそも大阪ではインターコンチネンタルホテル大阪や大阪マリオット都ホテルなどのオープンがあったものの、この3年間の新規オープンホテル数は限られる。 (<http://toyokeizai.net/articles/-/55580?page=2>)
- i. JR貨物石巻港駅から、隣接する日本製紙石巻工場までの専用線(延長2キロ)の敷設工事が終了し14日、同工場内で再開を祝う式典と復興第1便の出発があった。⁷

(<http://ishinomaki.kahoku.co.jp/archives/2013/02/i/130215i-senyosen.html>)

- j. 先頭車の一席から、各駅での乗車数をながめてみる(降車数は各駅とも確認できず)。撫養では15名、金比羅前では20名、教会前では14名、立道では12名の乗車があった。

(http://www.geocities.jp/mini_history_of_rail/nrto/00.html)

- k. 病院で働く職員は何か間違いが起こった、または間違いになりそうだった、患者さんの転倒があった、クレームが寄せられたなどといった場合レポートを提出することになっています。

(<http://sp.koukankai.or.jp/torikumi/iryouanzen.html>)

- l. 昨日、協議会の後、市長による「本山町を支援する」との宣言があった。
- m. 撮影禁止の看板が設置してあるにもかかわらず、観光客による絵画の撮影が複数あった。

逆行類と一般発生類との重要な違いとして表現の客観性(主観性)がある。逆行類が主観的な表現であったのに対して、一般発生類は、特定参与者に視点を重ねずに、いわば「傍観者」的に事態描写を行う客観的な表現である。そのため、一般発生類によって、(30a', b')のように話し手・聞き手・身内(「田中君」)の行為を描写することは難しい。客観的な表現に、話し手・聞き手・身内の存在はそぐわない。特定参与者の視点を排して視点中立的であろうとすること、積極的に視点が重ねられる話し手・聞き手・身内が存在することが互いに齟齬をきたすからである。

- (30) a. また、調査の結果、本人以外によるポイントの不正使用があったことを

⁷この例ではSEN(「再開を祝う式典」)と一般発生類のVN(「復興第1便の出発」)とが並立されており、同じ一つの動詞「ある」を共有している。この事実は、ガ格名詞句の性質、「ある」の性質に関して、出来事発生文_{SEN}と一般発生類とが同じ特徴をもつことを示唆する。一方で、「(今日はいいことばかりで)*同窓会と、恋人から連絡があった」が非文であることから分かるように、SENと逆行類のVNとは等位接続・動詞共有ができない。以上の事実は、第2節の表2に提示した結果と軌を一にするものである。

確認いたしました。(http://www.cpp.co.jp/capat/topics_0626.html)

- a'. 昨日、[*私/*君/?田中君] による/の社員 ID の不正使用があったことは、他言無用だ。
- b. 今回各科医師の募集がございしますが、その中でも内科を強く求めています。常勤医師の退職があった為、以前の体制に戻す為、そして常勤医師の負担軽減に伴う募集です。(下線引用者)

(http://www.drs-avenue.net/jyoukin/detail-html/default/670.html)

- b'. [*私/*君/?田中君] の退職があったため、求人広告が出ていた。

事態参与者に関するこの制限は、逆行類が、話し手・聞き手・身内を事態の参与者とすることに制限はなく、むしろそのような参与者の視点（話者の直示的中心）から事態の発生を描写する構文であったことと対照的である。

以上、逆行類に表現可能な事態が限定的であったのに対して一般発生類は多様な事態を表現可能であること、逆行類が主観的な表現であったのに対して一般発生類は客観的な表現であることを確認した。以下、本節の残りの部分では、一般発生類の文体的特徴と、「非個人的活動」を表す一部の一般発生類の特徴について触れておく。

一般発生類には、報告書、論文、ニュース記事などの公的・客観的記述が求められる領域との親和性の高い、文体的にややかたいものが見受けられる。例えば、本節冒頭の(29d)は実際に特許発明品の説明において使用されたものであるし、(29e)は実習報告書にて、(29f)は事業報告書にて使用されていた。(29g)は論文からの例で、(29h)は新聞の論説記事からの例、(29i)はニュース記事からの例である。(29j)は個人のブログからの例であるが、このブログは各駅における利用者数の計測結果を報告しており、客観的な記述を目的としたものとみてよい。このような文体的特徴のために、わざわざそういった表現上の態度をとることが普通ではない日常会話のような場面では、一般発生類の使用が不自然(#)に感じられることがある(例(31))。

- (31) a. なんか、おみそ汁すごい少なくなってる。# 水分の蒸発があったのかな。
cf. なんか、おみそ汁すごい少なくなってる。水分が蒸発したのかな。
cf. (29d)
- b. # 授業中にまた学生の居眠りがありましたよ。困ったもんですね。
cf. 授業中にまた学生が居眠りしましたよ。困ったもんですね。
cf. (29e)
- c. # そういえば、この近くで年末に新しいファミレスのオープンがあったよね。
cf. そういえば、この近くで年末に新しいファミレスがオープンしたよね。
cf. (29h)

一般発生類の文体的なかたさは、例えば動作主標示の「～による」やVN「漸減」のような独自に文体的なかたさをもつ要素の存在に起因する場合があるが、(31)のように特にそういった要素が文内に出現していないのであれば、その文体的特徴は一般発生類自体がもつものとも言える。しかし、すべての一般発生類に当該の文体的なかたさが観察されるわけではない。例えば、一部の一般発生類において、VNPが定の場合には問題の文体的特徴が観察されるが(例(32a, b)), VNPが不定の場合には特別な文体的特徴が見られない(例(32a', b'))ということがある。一般発生類における文体的特徴に関与する要因についてはこれ以上は立ち入らず、現時点においては、傾向として問題の文体的なかたさが一般発生類に観察されるといふ程度の記述に留める。

- (32) a.# 昨日、○田×男の自殺があったらしいじゃん。
 cf. すなわち、一月から三月までは過去二年間と変わらないのに対して、月初めに○さんの自殺があった四月に少年の自殺者は急増し、[…]。(鮎川潤「少年非行とマスメディア」『犯罪とメディア文化』)
 a'. 昨日、向かいの公営住宅で(子どもの)自殺があったらしいじゃん。
 b.# 昨日、谷川岳で○田×男の遭難があったらしいじゃん。
 b'. 昨日、谷川岳で(登山家の)遭難があったらしいじゃん。

本節の最後に、「非個人的活動」を表す一般発生類を取り上げたい。ここでの「非個人的活動」というのは、次の2つのことを意味する。まず、当該の事態は「活動」である。ここでは、「活動」を「人間によって意図的に行われる、一定の継続時間を有するような行為」と定義する。そのため、「噴火」のような自然現象や、「転倒」のように人間の関与はあってもその意図の関与がない事象、「引退」のような開始と終了が同時の瞬間的な出来事は、この意味では「活動」と呼ばない。そして、当該の活動は「非個人的」なものである。つまり、一個人を計画・行動の自由な主体とするような活動ではなく、業務上の活動のように拘束性のある活動や集団活動のように組織的な活動のことである。(33)に非個人的活動の一般発生類の具体例を挙げる。

- (33) a. 今朝、隅田川の掃除があった。
 b. 昨日、本棚の整理があった。
 c. 5時に第4プールで背泳ぎの練習があった。
 d. 先週、粗大ごみの回収があった。
 e. 午前中に文学部棟で火災報知機の点検があった。

(33a)が使用されるのは、例えば、地域の人々が集まって川の掃除を行ったような場合であり、誰かが一人自主的に川のごみ拾いをしたような場合ではない。(33b)についても、これが用いられるのは、典型的には図書館において図書館員による本棚の整理が実施されたといった場合であり、例えば研究室の本棚を個人が自主的に

整理したような場合には使用されない。同様に (33c) も、例えば授業として背泳ぎの練習が行われたことを表すことができるが、個人的な練習に言及するものではない。(33d, e) についても、例えば委託業者による業務活動が実施されたものと解釈される。

一般発生類のなかからわざわざこの類を取り上げたのには次の2つの理由がある。1つ目の理由は、非個人的活動の一般発生類には上述の文体的なかたさが見られないということである。もちろん動作主標示の「～による」のように文内に文体的にかたい語が生起したような場合は別であるが、そうでなければこの類は文体中立的である。2つ目の理由は、他の「～がある」文または「～がある」の関わる構文との関係において注目すべき特徴があるからである。まずは存在文との関わりについて、(34) のように、非個人的活動の一般発生類は予定の存否を述べる存在文に移行可能であることが分かる。(34) は、特定の時間に特定の活動を実施する予定が発話時以前に存在していたが、当該の予定は実施されずに破棄されたことを表している。(35) のように、その他の一般発生類にこの種の移行は認められない。

- (34) a. 本当は午前中に隅田川の掃除があったのだが、突然中止になった。
 b. 本当は2時からB教室でダンスの練習があったのだが、突然中止になった。
- (35) a. *本当は先月に山田選手の引退があったのだが、突然現役続行が発表された。
 b. *本当は昨日、オバマ大統領の来日があったのだが、突然延期となった。

さらに、(36) のように、非個人的活動の一般発生類には予定の所有者をトピックとして付加することが可能である。(37) のように、他の一般発生類の場合は、そのようなトピックをたてることができない。

- (36) a. 子どもたちは、今朝、隅田川の掃除があった。
 b. 花子は、昨晚、ダンスの練習があった。⁸
 c. 私は、昨日、火災報知機の点検があった。
- (37) a. *山田選手は、先月、引退があった。
 b. *オバマ大統領は、昨日、来日があった。
 c. ?? 私は、昨日、女子更衣室の盗撮があった。

(36) のような予定のトピック構文の存在は、一般発生類における参与者制限との関係から興味深い事実だと言える。(30) を例に確認したように、一般発生類では

⁸ 匿名査読者から、(i) の事態は「花子」一個人の個人的活動ではないかとの指摘を受けた。しかし、(33c) の場合と同様に、この「ダンスの練習」は、例えば「ダンスレッスン」のような組織的な活動だと解釈される。参加者が結果的に「花子だけ」だったとしても、この事実は同じである。この意味で、(i) の「ダンスの練習」が表すのは「非個人的活動」である。

(i) 花子だけ、昨晚、ダンスの練習があった。

話し手・聞き手・身内は VNP が表す事態の参与者とはなれない。これは、(38) のように、非個人的活動の一般発生類においても同様である。しかし、非個人的活動の一般発生類の場合は、(36) のような予定のトピック構文に移行することによって、問題の参与者制限なしに、VNP の事態と参与者との関係を表すことができるのである。

(38) 午前中に文学部棟で {委託業者 / *私 / *君 / ?? 田中君} による / の火災報知機の点検があった。

(34), (36) は、どちらも非個人的活動の一般発生類と〈予定〉の意味との密接な関係を示唆するものであるが、この点に関しての詳細な記述は別稿に譲ることとしたい⁹。

5. VN の項具現

本節では、出来事発生文_{VN}における VN の項具現のあり方を観察していく。まず、一般発生類と逆行類における項・付加詞具現の対照的なあり方を見る (5.1 節)。次に、事態参与者の不問化に関する機能について「VN する」文との違いに着目しながら見ていく (5.2 節)。

5.1. 具現項・付加詞の統語的特徴

VN の項・付加詞が現れる統語上の位置に関して、一般発生類と逆行類との間で大きな違いが観察される。

逆行類においては (39) のように、VN の項のうち、事態発生の起点と解釈される項がカラ格をとり、着点と解釈される項がニ格をとって、VNP 外部に現れるのが基本的なかたちである。引用の内容を表す要素（「あの例は非文だ」と）や道具・手段を表す要素（「メールで、ヘリコプターで」）も VNP 外部に出現する。

- (39) a. 昨晚遅くに忘年会幹事から（私に）[VNP 電話] があった。
 b. 「あの例は非文だ」と山田先生から（私に）メールで [VNP 指摘] があった。
 c. 政府から（私たちに）ヘリコプターで [VNP 物資の提供] があった。

ただし、(40) のように、「VN する」文におけるガ格項・ヲ格項に相当する要素は、逆行類に限らず出来事発生文_{VN} 一般において、そのままガ格・ヲ格をとって具現することはない（森山 1988）。逆行類の場合、この種のガ格項はカラ格をとって具現する。ヲ格相当項はノ格標示を受けて VNP 内部に留まる。

- (40) a. 政府 {が / から} 避難民に物資を提供した。
 b. 政府 { * が / から} 避難民に物資 { * を / の} 提供があった。

⁹ (36) のような予定のトピック構文については、久保田 (2012) に詳細な記述・分析がある。

逆行類のVNの項・付加詞がVNP外部に現れるのが基本であったのと対照的に、一般発生類においては(41)のようにVNの項・付加詞はVNP内部に留まるかたちを基本とする。

- (41) a. 文京・松岡両キャンパスサークル間の交流促進を進めた結果, […] [VNP 他キャンパスサークルへの加入]があった。 = (29f)
 b. 昨日, 国境付近で [VNP 難民への襲撃]があった。
 c. この頃から [VNP 遊ぶものから飾るもの, つまり雛遊びから雛祭りへの変化]があったのではないかと考えられます。
 (<http://www.kyoto-minpo.net/html/naruhodo-kyoto/ningyou/hinamaturi/index.html>)
 d. 昨日, ○×老人ホームで [VNP 職員から入居者への虐待]があった。
 e. 出所後すぐに, [VNP 犯人から警察への復讐]があった。
 f. [天文研究会の歴史(80年代~90年代):引用者注]
 また, [VNP 10年近く参加を続けていた大天連からの脱退]があった。
 (<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Club/9581/about/rekishi/rekisi.html>)
 g. 昨日, [VNP つるはしでの遺跡の破壊]があった。
 h. 14日, [VNP 戦闘機での基地の爆撃]があった。
 i. 昨日, 協議会の後, [VNP 「本山町を支援する」との[宣言/公言/発表]]があった。

一般発生類におけるVNの項・付加詞の句外具現は,(42),(43),(44)のように文の容認度を下げる。容認度判断の記号から分かるように項・付加詞の句外具現がまったく認められないわけではないが,句内具現の(41)と比較して,また,逆行類の(42'),(43'),(44')と比較すると項・付加詞の句外具現の容認度が劣ることが確認できる。

- (42) a. ?? 文京・松岡両キャンパスサークル間の交流促進を進めた結果, …他キャンパスサークルに [VNP 加入]があった。
 b. ?? 昨日, 国境付近で難民に [VNP 襲撃]があった。
 c. ?? この頃から遊ぶものから飾るもの,つまり雛遊びから雛祭りに[VNP 変化]があったのではないかと考えられます。
 d. ?? 昨日, ○×老人ホームで職員から入居者に [VNP 虐待]があった。
 e. ?? 出所後すぐに, 犯人から警察に [VNP 復讐]があった。
 f. ?? また, 10年近く参加を続けていた大天連から [VNP 脱退]があった。
 (42') 忘年会幹事から私に [VNP 電話]があった。
 (43) a. ?? 昨日, つるはしで [VNP 遺跡の破壊]があった。
 b. ?? 14日, 戦闘機で [VNP 基地の爆撃]があった。
 (43') a. メールで [VNP 間違いの指摘]があった。
 b. ヘリコプターで [VNP 物資の提供]があった。

(44) ? 「本山町を支援する」と [VNP 宣言／公言／発表] があった。

(44') 「あの例は非文だ」と [VNP 指摘] があった。

しかし、一般発生類であっても、(45) のように VN の項の句外具現が認められる場合もある (森山 (1988: 270) の例を参照)。

(45) 先日、仙台刑務所から [VNP 脱獄] があった。

だが、この (45) も、(45') のように例えば手段を表す「ヘリコプターで」が VNP の外部に出現すると容認度が低下する。

(45') ?? 先日、仙台刑務所からヘリコプターで [VNP 脱獄] があった。

(45), (45') から分かることは、一般発生類においても意味的に VN を修飾する要素 (項・付加詞) の VNP 外具現が認可される場合もあるが、逆行類と比べてそこには不自由さが付き纏うことも確かだということである。

5.2. 事態参与者の不問化

ここでは、出来事発生文_{VN}における事態参与者不問化の機能について見ていく。一般発生類・逆行類ともに、「VN する」文 (受動形も含む) に比べて VN が表す事態への必須参与者を不問にしておくことが容易であることを確認する。

出来事発生文_{VN}では (46) (一般発生類), (47) (逆行類) のように、しばしば必須参与者の不問化が観察される。例えば, (46a) では誰が著名人を暗殺したのか, (46c) では誰が何を盗撮したのかということは、問題となっていない。

(46) a. この秋、ロシアでは既に3件の著名人の暗殺があった。

(<http://www.k2.dion.ne.jp/~soyuz/hitori200610.htm>)

b. 昨日、カンボジア有数の観光地で遺跡の破壊があった。

c. 昨晚、地元の駅で盗撮があったようだ。

d. 昨日、向かいの公営住宅で自殺があったらしい。

e. ところで、月初に会社で異動があったらしいんだけど、[…]

(http://blog.k-plaza.com/blog/personal_blog_main.asp?mbr_id=chi3326&art_no=341749)

(47) a. さっき、君に電話があったよ。

b. 昨晚、新人研修について連絡があった。

他動的事態において動作主の不問化が見られる (46a, b) のようなものに関しては、受動態の「VN する」文でも同様の内容を表すことができる (例 (46a', b'))。これは、受動文にも動作主不問化の機能があるからである。

(46) a'. この秋、ロシアでは既に3人の著名人が暗殺された。

b'. 昨日、カンボジア有数の観光地で遺跡が破壊された。

しかしながら、すべての必須参加者が不問に付されている(46c-e)に関しては、(46c-e)から分かるように、意味的に対応する「VNする」文がない。(46c-e)は、文中に具現されていない必須参加者がコンテキストから特定可能でなければ不適格である。

- (46) c.# 昨晚、地元の駅で盗撮 {した/された} ようだ。
 d.# 昨日、向かいの公営住宅で自殺したらしい。
 e.# ところで、月初に会社で異動したらしいんだけど、…。

逆行類に関しては、(47)と(47')との対比から分かるように、起点の不問化が逆行態「VNする」文に比べて容易である。(47)では誰から電話/連絡があったのかは問題となっていないのに対し、(47')においては誰が電話/連絡したのかコンテキストから特定可能でなければ不適格である。

- (47) a.# さっき、君に電話してきたよ。
 b.# 昨晚、新人研修について(私に)連絡してきた。

6. 「ある」の機能性

本節では、ここまでの観察から明らかになったことを基に、出来事発生文_{VN}一般発生類・逆行類の「ある」の特徴について、存在文の「ある」との異同に注目しながら整理する。そして、各種「ある」がもつ特徴を動詞の機能性(または語彙性)と関連づけて説明していく。記述の結果としては、存在文の「ある」、出来事発生文_{VN}一般発生類・逆行類の「ある」はそれぞれ表3のように特徴づけられることを示す。

表3 存在文、出来事発生文_{VN}の2類型における「ある」の特徴

	存在文の「ある」	出来事発生文 _{VN}	
		一般発生類の「ある」	逆行類の「ある」
事態アスペクトの特徴	〈状態〉	変化点を含有しない 動的事態	—
「(VNPが)ある」による VNの項・付加詞の認可	不可	難	可
意味	〈存在〉	〈発生〉	〈逆行〉
機能性	語彙的	中間的	機能的

この表から、存在文の「ある」と逆行類の「ある」が対極的な特徴をもち、一般発生類の「ある」はそれらの中間に位置づけられるような特徴をもつことが分かる。出来事発生文の「ある」が存在文の「ある」から派生したものだとは仮定すると、存在文の「ある」を基準に考えて、一般発生類の「ある」は存在文の「ある」に性質

上「近く」、逆行類の「ある」は存在文の「ある」に性質上「遠い」と特徴づけられる。そして、事態アスペクト、項・付加詞の認可、意味に関する「ある」の特徴は、機能的性質の強弱（または語彙的性質の強弱）と結びついている。以下、表3の中身を具体的に見ていく。

まず、「事態アスペクトの特徴」に関して、基本的にこれは、第2節で確認した「ある」の動態述語的特徴についての言語事実を事態アスペクトの特徴として述べたものに過ぎないのだが、ここでは、出来事発生文_{vn}逆行類の「ある」の特徴を「動的」というのではなく「-」（特徴なし）としたこと、また、一般発生類・逆行類「ある」の当該の特徴と機能性との関連について説明していきたい。

表3に示したように、逆行類の「ある」は独自の事態アスペクトの特徴をもたないのだと考える。もちろん[VNPがある]という単位では特定の事態アスペクトの特徴が見られるが、この特徴はVNPのもつ事態アスペクトの特徴が反映されたものであり、「ある」は事態アスペクトの特徴の決定に関与していない。つまり、VNPの表示事態が〈活動〉であれば〈活動〉の特徴が（例(48a, a')）、〈到達〉であれば〈到達〉の特徴が（例(49a, a')）、〈達成〉であれば〈達成〉の特徴が（例(50a-a'））[VNPがある]に反映されるということである。〈活動〉の事態については、(48b, b')のように、継続時間を表す「X（時間）」と整合的であり、また、変化点までの所要時間を表す「～するまでにX（時間）がかかる」内に現れた場合、この表現は開始点までの所要時間を表すもの（開始点読み）と解釈される。これは(48a, a')の「先生から電話があった」についても同様である。〈到達〉の事態については、(49b)のように継続時間を表す表現との相性は悪い（ただし、反復解釈の場合は可）。(49b')のように「～するまでにX（時間）がかかる」内に現れた場合、この表現は変化点（開始点＝終結点）までの所要時間を表す。これは(49a, a')の「花子に食料の支給があった」についても同様である。〈達成〉の事態については、(50b)のように継続時間を表す表現とは整合的であり、(50a)の「理論の説明があった」も同様である。しかし、(50b')のように「～するまでにX（時間）がかかる」内に現れた場合、〈達成〉の事態であれば当該表現には開始点読みも終結点読みも可能なはずであるが、(50a')には開始点読みしかない。だが、この事實は、〈達成〉の事態に存在するはずの終結点が逆行類「理論の説明がある」に欠落しているということを必ずしも意味しない。実際に、終結点までの所要時間を表す「X（時間）」の使用可否を見てみると、(50b'）の「先生が理論を説明した」と同様に(50a'）の「先生から理論の説明があった」も当該表現と整合的であることから、この逆行類の表示事態にも終結点の存在が認められる。

- (48) a. 先生から1時間、電話があった。
 a'. 先生から電話があるまでに1時間がかかった。（開始点読み）
 b. 先生が1時間、電話した。
 b'. 先生が電話するまでに1時間がかかった。（開始点読み）

- (49) a. *花子に1時間, 食料の支給があった。
 a'. 花子に食料の支給があるまでに1時間がかかった。
 b. *花子に1時間, 食料を支給した。
 b'. 花子に食料を支給するまでに1時間がかかった。
- (50) a. 先生から1時間, 理論の説明があった。
 a'. 先生から理論の説明があるまでに1時間がかかった。(開始点読み)
 a". 先生から1時間で理論の説明があった。(終結点読み)
 b. 先生が1時間, 理論を説明した。
 b'. 先生が理論を説明するまでに1時間がかかった。(開始点/終結点読み)
 b". 先生が1時間で理論を説明した。(終結点読み)

このように逆行類の「ある」が[VNPがある]の事態アスペクト的特徴の決定に非関与的であるのは、この「ある」の語彙の意味が希薄で機能的性質が強いからだとして説明できる。すなわち、逆行類では、[VNPがある]が合成述語として単一の事態を形成し、その内容的情報の表示をVNPが、文法的情報の表示を「ある」が担うという役割分担が成立しているため、事態アスペクトという内容面の特徴の決定に「ある」は関与しないのだと考えられる^{10,11}。

¹⁰ 第5節までの議論の段階では、逆行類の「ある」は元の〈存在〉の意味が「くる」(〈移動〉)の意味へと変化したものかもしれないという可能性もあった。実際に岸本(2005:206)では、「ジョンに[連絡/電話/伝言]があった」の「ある」を「ある種の移動を表す」としている。しかし、(48a)によってこの可能性は否定される。「くる」の事態アスペクトの特徴は〈到達〉であるため、継続時間を表す表現(「1時間」)との共起はできないはずだからである(例(i))。よって、やはり逆行類の「ある」は語彙の意味の希薄化が進んだ、機能的性質の強い動詞だと考えるのがよい。

(i) 先生から1時間, 電話が[あった/*きた]

¹¹ 合成述語[NP-格助詞V]の特徴として、(i)、(ii)のようにNPとVの切り離しが困難であることがしばしば指摘される(Grimshaw and Mester (1988), 村木(1991), 影山(2004a, b), 大塚(2004)など)。(iiia, c)のように逆行類にも同様の事実が観察される(Vが語彙的な(iiib, d)の容認度と比較されたい。これらの例の「電話」はモノと解釈される)。

- (i) ?? 今日客が父にある。(大塚 2004: 118)
 (ii) a. *中田選手が全試合にしたのは、出場だ。(影山 2004a: 24)
 b. *テノール歌手がしているのは、魅力的な声だ。(同: 24)
 (iii) a. ?? 昨晚遅くに、忘年会幹事から電話が私にあった。
 b. 昨晚遅くに、忘年会幹事から電話が私に送られてきた。
 c. ?? 昨晚遅くに忘年会幹事から私にあったのは電話だ。
 d. 昨晚遅くに忘年会幹事から私に送られてきたのは電話だ。

しかしながら、こうしたNPとVの結合の強さは一律ではなく、(i'), (ii'a), (iii'c)のようにことばを補えば容認度が上がるような結合度の弱いものもある((iii'c)は匿名査読者からの指摘による)。

- (i') 今日, 久しぶりの客が父にある。
 (ii') a. 香川がドイツ戦にしたのは、途中出場だ。フル出場ではない。(小野 2014: 37)
 (iii') c. 昨晚遅くに忘年会幹事から私にあったのは、メールではなく電話だ。

一般発生類「ある」の事態アスペクト的特徴については、第2節で確認したように、「変化点を含有しない動的事態」である。変化点の欠如という特徴については、存在文の「ある」の状態述語的性質を引き継いだものと分析したが、このことを本節で注目している語彙性・機能性の観点から捉えなおすと、〈存在〉(事態アスペクト的には〈状態〉)という「ある」本来の語彙的性質が残存しているのだとも言える。そのため、逆行類の機能的な「ある」とは異なり、一般発生類における[VNPがある]の事態アスペクト的特徴は、VNPの表示事態が〈活動〉(例(51a, a'))であれ〈到達〉(例(52a, a'))であれ〈達成〉(例(53a, a'))であれ、語彙的な「ある」の関与によって「変化点を含有しない動的事態」となる。

- (51) a. 1時間、ピアノの練習があった。
 a'. *ピアノの練習があるまでに1時間がかかった。
 b. 1時間、ピアノを練習した。
 b'. ピアノを練習するまでに1時間がかかった。(開始点読み)
- (52) a. *1時間、復興第1便の出発があった。
 a'. *復興第1便の出発があるまでに1時間がかかった。
 b. *1時間、復興第1便が出発した。
 b'. 復興第1便が出発するまでに1時間がかかった。
- (53) a. 1時間、本棚の整理があった。
 a'. *本棚の整理があるまでに1時間がかかった。
 b. 1時間、本棚を整理した。
 b'. 本棚を整理するまでに1時間がかかった。(開始点/終結点読み)

次に、表3の2項目目「[(VNPが)ある]によるVNの項・付加詞の認可」について見る。これは、5.1節で出来事発生文_{VN}一般発生類・逆行類においてVNの一部の項や付加詞がVNPの外部に出現できるかどうかを記述したが、それについての事実を「(VNPが)ある」による認可の観点から整理しなおしたものである。存在文の「VNPがある」についての事実も加えて、(54)(存在文)、(55)(一般発生類)、(56)(逆行類)にてこの特徴を確認しておく。

- (54) a. *相談室が設置された背景には、職員から入居者に[VNP虐待]がある。
 a'. 相談室が設置された背景には、[VNP職員から入居者への虐待]がある。
 b. *今回の自爆テロの背景には、戦闘機で[VNP基地の爆撃]がある。

この種のNPとVの切り離しが可能であることの意味については、「[NP-格助詞V]が合成述語ではない、そしてVは軽動詞でない」という立場もあれば(例えば、影山(2004a, b)), 「[NP-格助詞V]が合成述語でないことを必ずしも意味せず、Vは軽動詞かもしれないし語彙的な動詞かもしれない」という立場もある(例えば、Ohara(2004), 小野(2014))。ここでこの複雑な問題を議論することは紙幅の都合上避けることにする。よって、本稿では出来事発生文における[VNPがある]の切り離しの可否と「ある」の機能性とを関連づけて論じることとはしない。

- b'. 今回の自爆テロの背景には, [VNP 戦闘機での基地の爆撃] がある。
- (55) a. ?? 昨日, ○×老人ホームで職員から入居者に [VNP 虐待] があった。
 a'. 昨日, ○×老人ホームで [VNP 職員から入居者への虐待] があった。
 b. ?? 14 日, 戦闘機で [VNP 基地の爆撃] があった。
 b'. 14 日, [VNP 戦闘機での基地の爆撃] があった。
- (56) a. 昨晚遅くに忘年会幹事から (私に) [VNP 電話] があった。
 b. 「あの例は非文だ」と山田先生から (私に) メールで [VNP 指摘] があった。

(54a, b) から分かるように, 存在文の「ある」は VN の項・付加詞を認可することができない。(54) の存在文では, VNP が特定の動的事態を表し, 「ある」はその動的事態が別の事態発生の背景として存在することを表している。VNP が表す事態と「ある」が表す〈存在〉の事態が互いに独立した2つの事態であるため, 一方 (VN) に意味的に関与する要素を他方 (「ある」) が認可するということはありえない。

対照的に, (56) のように, 逆行類の「(VNP が) ある」は VN の項・付加詞を認可することができる。この事実について, 先の, 事態アスペクト的特徴の決定に逆行類「ある」が非関与的であることに対して与えられた説明と同様の説明が可能である。すなわち, 「VNP: 内容的情報の表示, 「ある」: 文法的情報の表示」とする [VNP がある] という意味的に単一のまとまり (合成述語) が成立しているため, VN の項・付加詞は, VNP 内部に留まった場合であっても VNP 外部で [VNP がある] にかかった場合であっても, 同一の内容的情報を意味的に修飾することが可能なだと説明できる。このように [VNP- 格助詞 V] において V による VN の項・付加詞の認可が可能である理由を V の語彙性の希薄さ・機能性の高さに求める説明は, V が「ある」以外の場合にも適用できることから, この説明の妥当性が裏づけられる。例えば, 「意味的に不完全」だと特徴づけられている (Grimshaw and Mester 1988) いわゆる軽動詞「する」がある。(57) のように「VN をする」軽動詞構文においても, VN の項・付加詞が VNP 外部に具現可能である。(58) のように [VNP- 格助詞 V] の V が語彙的な場合は, VN の項・付加詞の句外具現は認められない。

- (57) a. 鈴木先生に「あの例は非文だ」とメールで [VNP 指摘] をした。
 b. 仙台刑務所からヘリコプターで [VNP 脱獄] をした。
- (58) a. *鈴木先生に「あの例は非文だ」とメールで [VNP 指摘] を躊躇した。
 a'. [VNP 鈴木先生への「あの例は非文だ」とのメールでの指摘] を躊躇した。
 b. *仙台刑務所からヘリコプターで [VNP 脱出] を計画した。
 b'. [VNP 仙台刑務所からのヘリコプターでの脱出] を計画した。

以上の機能性に関する議論を踏まえた上で一般発生類の「(VNP が) ある」に目を向けよう。(55) を (54), (56) と比べて分かるように, 一般発生類では, 逆行類の場合よりは VN の項・付加詞の句外具現の容認度が低いのだが, 存在文の場合

よりはその容認度が明らかに高いと言える。こうした事実を基に、表3では一般発生類における「(VNPが)ある」によるVNの項・付加詞の認可を(「不可」ではないが)「難」と記述している。これに関しては、一般発生類の「ある」が、存在文の「ある」ほどは語彙的ではないが、逆行類の「ある」ほどは機能的でもないという、機能性・語彙性における中間的な性質の現れであるとして特徴づけておく。

以上、存在文、出来事発生類_{VN}一般発生類・逆行類の「ある」について、事態アスペクトとVNの項・付加詞の認可に関する特徴を動詞の機能性の強弱と関連づけながら整理・分析を行った。その結果として、機能性に関して、逆行類の「ある」が最も機能的であり、一般発生類の「ある」は、存在文の語彙的な「ある」と逆行類の機能的な「ある」の中間に位置づけられるような性質をもつものだと主張した。機能性という同様の着眼点をもって「ある」の特徴を記述した研究として、村木(1991)と大塚(2004)がある。以下では、両研究の記述と本稿の記述とを照らし合わせ、本研究の意義を明確にしておく。

村木(1991)、大塚(2004)は、語彙の意味が希薄で何らかの文法的機能を果たす動詞を「機能動詞」と呼び、出来事発生文の「ある」については〈存在〉という語彙の意味の減退した機能動詞であるとしている。この「ある」に関して、述語形成という文法的役割のみを有するとされたり(大塚2004)、ヴォイスの意味について、(59a)のように受動的なものや(「誘いがある←→誘われる」)、(59b)のように中立的なものがある(「論議がある←→論議する／される」)ことが指摘されたりしている(村木1991)。

- (59) a. やっと何とか生きる事に落ち着きを取り戻した時、国立オペラ劇場オペラコミック座のオーディションを受けないかとの誘いがあった。
(『毎日新聞』1978年8月23日；村木1991:274)
- b. 「三年間倍増」のベースをどこにとるかで、政府内部で論議があったが、いちおう「五十二年度、ドルベース」になった。
(『週刊読売』1978年8月6日；同:274)

(59a)の出来事発生文は、本稿でいう「逆行類」にあたる(厳密には「誘い」はVNではないが、項をとり、動詞「誘う」との関係が明確であることから、VNに準ずるものとしておく)。実際に、この文には「私に」という要素が潜在すると村木(1991)は記述しているが、これはまさに逆行類の特徴である。(59b)の出来事発生文に関しては、本稿でいう「一般発生類」にあたる。つまり、村木(1991)の時点で、逆行類と一般発生類とを区別する可能性は示唆されていたわけである。しかしながら、村木(1991)では(59a)と(59b)の出来事発生文の違いは単にヴォイスの特徴の違いとして捉えられるに留まり、本稿がこれまで明らかにしてきた様々な特徴の違いについては言及されておらず、出来事発生文の類型化も試みられてはいない。また、機能動詞における語彙の意味希薄化の程度に段階性があることは村木(1991)、大塚(2004)ともに認めつつも、この問題は出来事発生文の「あ

る」を対象にしては考察されていない。よって、村木 (1991)、大塚 (2004) において単に「機能動詞」として一括りにされていた「ある」に対して、本稿は、〈逆行〉の文法的意味をもつ機能動詞の「ある」と、〈存在〉の語彙的性質を残す、機能性の弱い「ある」の2種類の存在を明らかにしたことになる。

7. まとめと今後の課題

本稿は、これまで看過されてきた出来事発生文_{VN}を取り上げ、その特徴を詳細に記述した。一般発生類・逆行類の2類型を提示し、構文形式・意味、表現の客観性、VNの項・付加詞の具現、「ある」の動態性、「ある」の意味などに注目して、2類型の多角的な特徴づけを行った(第1節表1)。この分類は、出来事発生文の特徴をさらに掘り下げていく際の記述的な基礎として、今後の研究に資するものである。

また、「～がある」という存在文の形式をとりながらも意味的には動詞文(「VNする」文)と関係する出来事発生文_{VN}を考察対象とすることで、これまで別個に研究が進められてきた存在文の領域と動詞文の領域との関係の一端を明らかにすることができた。具体的には、事態参与者の前景化・背景化という主に動詞文に関わる機能領域において、「～がある」文は、動詞文(受動文も含む)よりも広い範囲で参与者不問化の機能を発揮することが確認できた。

さらに、先行研究においては単に「動的」だと特徴づけられていた出来事発生文の「ある」に関しても、出来事発生文_{SEN}、一般発生類の出来事発生文_{VN}の「ある」には状態述語的側面(事態開始点の不在)が観察され、存在文の「ある」との連続性が確認できた。その一方で、逆行類の「ある」については、存在の「ある」と鋭く対立するような動態述語的性質を見せることも分かった。そして、問題の動態性とVNの項・付加詞具現に関する事実を基にして、機能性という観点から一般発生類の「ある」は機能性が比較的弱く、逆行類の「ある」は機能性が比較的強いと特徴づけた。これにより、従来の機能動詞論における「ある」の記述を精緻化することができた。

以下、今後の課題について述べる。第6節でVNの項・付加詞の句外具現について「ある」の機能性と関連づけて説明はしたが、その際に持ち出した「合成述語」というメカニズムに関しては簡単な記述に留めた。項・付加詞の具現については、研究蓄積の多い「VNをする」軽動詞構文との比較はもちろんのこと、多様な機能動詞結合(村木1991)も広く視野に入れて、より一般的な視点からメカニズムの明示化を図る必要がある。「ある」の意味変化に関しても、〈逆行〉の「ある」の存在は指摘したものの、〈存在〉の意味と〈逆行〉の意味との派生関係については触れなかった。この点には当然共時的な説明も必要であるし、さらには通時的観点からの把握、また、「ある」が基本動詞であるということから通言語的な観点からの記述も求められる。

参 照 文 献

- Grimshaw, Jane (1990) *Argument structure*. Mass., The MIT Press.
- Grimshaw, Jane (2011) Verbal nominalization. In: Klaus von Heusinger, Claudia Maienborn, and Paul Portner (eds.) *Semantics: An international handbook of natural language meaning vol.2*, 1292–1313. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Grimshaw, Jane and Armin Mester (1988) Light verbs and θ -marking. *Linguistic Inquiry* 19(2): 205–232.
- 伊藤 健人 (2001) 「主語名詞句におけるガ格とカラ格の交替について」『明海日本語』6: 45–63. 明海大学日本語学会.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (2004a) 「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』4(1): 22–37.
- 影山太郎 (2004b) 「存在・所有の軽動詞構文と意味編入」影山太郎・岸本秀樹 (編) 『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集—』3–23. 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (2011) 「モノ名詞と出来事名詞」影山太郎 (編) 『日英対照 名詞の意味と構文』36–60. 東京: 大修館書店.
- 金水敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』東京: ひつじ書房.
- 岸本秀樹 (2005) 『統語構造と文法関係』東京: くろしお出版.
- 岸本秀樹・影山太郎 (2011) 「存在と所有の表現」影山太郎 (編) 『日英対照 名詞の意味と構文』240–269. 東京: 大修館書店.
- 古賀裕章 (2008) 「「てくる」のヴォイスに関連する機能」森雄一・米山三明・山田進・西村義樹 (編) 『ことばのダイナミズム』241–257. 東京: くろしお出版.
- Koga, Hiroaki and Ohori Toshio (2008) Reintroducing inverse construction in Japanese: The deictic verb *kuru* “to come” in the paradigms of argument encoding. In: Robert D. Van Valin, Jr. (ed.) *Investigations of the syntax-semantics-pragmatics interface*, 37–57. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 久保田一充 (2012) 「「息子は明日運動会がある」構文—「予定」を表す「象は鼻が長い」構文の変種—」『日本語文法』12(2): 196–212.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』東京: くろしお出版.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』東京: 明治書院.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』東京: ひつじ書房.
- 中右実 (1998) 「空間と存在の構図」中右実・西村義樹 (編) 『構文と事象構造』2–54. 東京: 研究社出版.
- 新居田純野 (2004) 「人の《特性》と《状態》をあらわす存在文—「～がある」形式について—」『日本語文法』4(2): 202–213.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』東京: ひつじ書房.
- 西山佑司 (2009a) 「存在文の多用な意味 (コピュラ文, 存在文, 所有文—名詞句解釈の観点から (中) —)」『言語』38(5): 66–73.
- 西山佑司 (2009b) 「所有文が有する二重構造 (コピュラ文, 存在文, 所有文—名詞句解釈の観点から (下) —)」『言語』38(6): 8–16.
- 西山佑司 (2013) 「名詞句の意味機能から見た存在文の多様性」西山佑司 (編) 『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る—』243–328. 東京: ひつじ書房.
- Ohara, Masako (2004) An event decomposition approach to complex predicate formation. 影山太郎・岸本秀樹 (編) 『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集—』147–163. 東京: くろしお出版.
- 小野尚之 (2014) 「「Nをする」構文における項選択と強制」岸本秀樹・由本陽子 (編) 『複雑述語研究の現在』17–40. 東京: ひつじ書房.
- 大塚望 (2004) 「「～がある」文の多機能性」『言語研究』125: 111–142.
- Shibatani, Masayoshi (2003) Directional verbs in Japanese. In: Erin Shay and Uwe Seibert (eds.) *Motion, direction and location in languages: In honor of Zygmunt Frajzyngier*, 259–286. Amsterdam:

John Benjamins Publishing Company.

Smith, Carola S. (1991) *The parameter of aspect*. Dordrecht: Kluwer Academic Press.

高橋太郎・屋久茂子 (1984) 「「～がある」の用法— (あわせて) 「人がある」と 「人がいる」の違い—」『国立国語研究所報告 79 研究報告集 5』 1-42.

寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 東京：くろしお出版.

執筆者連絡先：

[受領日 2015年3月5日

〒480-1197 愛知県長久手市片平2丁目9 最終原稿受理日 2016年11月29日]

愛知淑徳大学初年次教育部門

e-mail: kkubota@asu.aasa.ac.jp

Abstract

“X-*ga aru*” Sentences Expressing Event Occurrence

KAZUMITSU KUBOTA

Aichi Shukutoku University

This paper examines the eventive “X-*ga aru*” sentences, specifically focusing on sentences in which the X is a verbal noun (VN). Although the verb *aru* in the eventive “X-*ga aru*” sentences has been characterized as “dynamic,” which contrasts with the stative *aru* in existential sentences, I argue that the dynamicity of *aru* in sentences differs: Some are relatively weak, whereas some are relatively strong. Therefore, according to this linguistic fact, the eventive “VN-*ga aru*” sentences can be grouped into two types: General-Event Type and Inverse-Event Type. These two types are characterized multidimensionally by their sentence structures and meanings, the subjectivity of expression, the argument realization of the VN, the semantics of *aru*, and so forth. I also claim that the dynamicity and the argument licensing ability of *aru* are related to the functional property of the verb, with the *aru* of the General-Event Type being less functional (more lexical) and that of the Inverse-Event Type being more functional (less lexical).